明海大学不動産学部
不動産の不思議
学生たちの視点と発見
第344回

特徴のある2軒長屋
植物育て住環境高める仕掛け

吉田　勝
不動産学部3年

【学生の目】

梅雨が始まり最近は夜になっても暑さが残る。新型コロナ感染症はまだ収まる様子はないが、最近は外もにぎやかである。そんな中、街歩きに出掛けたところ、写真の建物が目に入った。なぜなら、あまり見たことのないデザインの住宅だったからだ。

特徴は第1に、建物の形がシンプルで直方体の形をしている。2階から上を片持梁で持たせ、道路側にオーバーハングさせているために一層インパクトが強い。最上階の左右にあるルーフバルコニーの物干しの金具が見えなければオフィスと間違えそうである。

第2に、窓の付け方だ。まず、日本の住宅ではあまり見ない横一列の連窓になっている。次に、窓が外壁面より少し外側に出ている。窓が外壁に落とす影によって建物がより立体的に見える効果がある。また、窓が小さなひさしになって、モルタル仕上げの外壁面に雨水が流れて汚れが付着するのを防いでいる。更に、最上部の窓が外壁面の上端に付いている。どのようにして雨が漏らないようにしているのか、雨仕舞に興味を持つと同時に、ガラスが空を映して広がりを感じることが楽しく、建物の最上部までしっかり眺める自分に気付く。

第3に、無彩色の仕上げだ。外壁は全面的にモルタル仕上げだ。1階のアプローチ部分はインタロッキング仕上げで半屋内空間の温かさがあるが、色彩は無彩色に近い。最近の住宅には珍しい。

第4に、進行中の壁面緑化だ。建物正面の外壁を上下に、一番下の窓の外側の左右にワイヤーが張られている。縦のワイヤーは主に最上階のルーフバルコニーから下に植物を伸ばし、横のワイヤーは2階窓下のプランターから上に植物を伸ばすようだ。前者は外壁面の断熱効果を、後者は窓面のプライバシー保護を狙っているようだ。現状、ワイヤーに植物が少し絡まっている段階だが、施肥や水やりなどの手間暇をかけて植物を育てようとする居住者の気持ちを応援したい。緑が育てば、無機質の外壁に温かさが生まれることだろう。

建物は全般にローコストだ。1階の階高が低く、外壁はモルタル仕上げで、構造は鉄骨造と思われる。サッシュはアルミの地金色だ。しかし、個性的な形や左右対称に2軒が寄り添う長屋形式の住まいがほほ笑ましい。時間をかけて植物を育てて住環境を高めようとする仕掛けがどう変化しているか、将来また見てみたい住宅だ。

左右対称の２軒長屋

【教員のコメント】

日本の住宅は「生んで育てる」文化に乏しい。総額が張る新築時は節約できるところはコストを抑え、住み続ける中で、暮らし方や価値観に合わせて追加投資して建物と住環境を熟成させる。育てる余韻を残す生み方と暮らし方を文化にしたい。